令和５年度　　自己評価総括表　　伊丹市立ささはらこども園

保育目標　　支え合い認め合う　ささはらっこ　弾む心で　未来へつなごう

項目	重点項目	達成目標・具体的施策	年度末評価	学校関係者評価　まとめ
学びの場である保育の充実	「愛情」を基盤とした自己肯定感の構築	・全ての職員で自己肯定感に観点をおいた子どもへのかかわり方についての話し合いや研修を年に２回実施する。 ・子どもの日々の様子や様々な保育者との関わりが保護者にも伝わるようにホームページや Google を用いて毎日発信する。 ・保護者アンケートにおいて「お子さんはこども園に行くことを楽しいと感じている。」「お子さんは様々な保育者と関わっていると感じる」と回答した人の割合が、８５％以上になる。	・自己肯定感に焦点を当てた研修を年１回行うと共に、子どもの姿を共有したり読み取りを職員会議で毎月行ったりした。すべての職員で話し合うことでより自己肯定感を育む関わりを意識できた。 ・保護者アンケートにおいて「こども園は ICT（ホームページ、Google、動画配信等）を活用して園での様子を発信している。」の項目で８８％の保護者が肯定的に受け止めており、保護者にこども園の様子を伝えることが達成できたと考える。 ・「お子さんはこども園に行くことを楽しいと感じている。」という項目については８９．１％の保護者が肯定的に受け止めていることが分かった。 （課題） ・「お子さんは様々な保育者と関わっていると感じる」という項目については８１％の保護者が肯定的に受け止めていたが、目標値は達成しなかった。アンケートの項目内容を検討し、保育者の定義を保護者にも明確に伝わるようにする。具体的に「担任以外の職員もお子さんの育ちに関わっている」等の文章に変更するとより明確に伝わるのではないか。 ・ホームページで担任以外の職員との関わりが見られる内容を載せる等工夫していく。	・園として自主性に重きを置いて取り組んでいることがよく理解でき、伝わった。結果だけでなく取り組みを大切にされていることがわかった。 ・自己肯定感に焦点を当てた保育に取り組んでいると感じた。 ・見た動画を見た印象としては、女児の方がたくさん映っているように感じた。そのあたりは公平に感じられるように配慮が必要だと感じる。また、動画のシーンを見て、感想や意見を言っている子ども達の姿も映してあげてほしいと感じた。（今回見ていただいた動画は、全体から選んだエピソードだと伝える。） ・保護者が、ささっこＤＡＹや参観日に全員来ていたと聞き、安心した。（年度当初に年間行事予定を知らせ、必ず参加してほしいと伝えている。）
	資質・能力を育む保育の推進	・「こども園は子どもが活動する中で、心弾ませられるような環境を整えている」の肯定的回答の割合が８５％以上になる。 ・乳児は週１回クラスごと、幼児の棟会議は週１回程度話し合いを行い、子どもの姿を資質能力の観点から読み取り、共有したり、乳幼児理解につなげたりし、その後の環境構成に活かしていく。	・「こども園は子どもが活動する中で、心弾ませられるような環境を整えている」の肯定的回答の割合が８６．８％で達成している。 ＜乳児＞ ・読み取りを行うことで子どもの姿、興味関心に合わせての環境をその都度会議で話し合い、次の環境構成に生かすことができた。 ＜幼児＞ ・環境構成においては棟会議が増やしたことで、棟内で異年齢児が交流をもったり関わり合って遊んだりすることにつながった。 ・“作ってみよう”というテーマでウェブマップを作成し、会議に取り入れることで、環境構成に生かすことができた。 ・子ども達に働きかけられることがないかと検討し、取り組みにつなげた（調理、養護） ・昨年の反省を踏まえ、他クラスと協力して時間を作る工夫をした。 （課題） ・たいよう組は他クラスとの交流につなげることが園舎の構造上難しく継続課題である。会議時にたいよう組ならではの活用方法や他クラスとのつながり方を検討していく。	・ウェブマップは、遊びの広がりをコーディネートしていくツールだと感じた。保育を進めていこうとする時に保育者には見通しのもてる、子どもにとっては自分達で進めた気持ちになる優れたツールだと思った。 ・保護者は心弾ませられるような環境を整えているということをどこまで感じているだろうか。 ・園内は子どもにとって非常に使いやすくなっているということが評価されているのだと感じる。
	ちがいを認め合える仲間づくり	・保護者アンケートにおいて、「子どもはこども園で他の人への思いやりについて学んでいる」と回答した割合が、85％以上になる。 ・違いを認め合おうとしている姿をホームページや動画などで保護者に発信していく。	・「こども園は異年齢の関わりが持ちやすい保育環境である」「お子さんはこども園で思いやりを育んでいる」という項目については９１％の保護者が肯定的に受け止め目標を達成することができた。 ・ホームページでは、異年齢での関わりを発信することができたが、動画での発信は難しかった。 ・幼児保育室を子どもが行き来しやすいように工夫し、子どもの思いを存分に生かした環境を意図的に整えたことで異年齢の関わりが深まった。 （課題） ・来年度は動画も用いてさらに異年齢の関わりを発信するかを園全体で検討する必要がある。	・小学校ではホームページなど個人が特定できないよう配慮している。動画や写真について、個人情報は十分に配慮して取り組んでほしい。 ・この園の特徴として壁がないこと、異年齢の関わりの良さは保護者の方にも十分に伝わっている結果だと思う。 ・保護者のアンケートが９１％の肯定的回答を得ていても◎にはならないのかと感じる。 ・今後も様々な方法で保護者に子どもの姿を伝えてほしい。
保育者の資質向上	職員研修・園内研修の充実	・講師を招聘した園内研修の機会を年１回以上持つ。 ・子どもの姿を共通理解するとともに互いの保育の様子を動画で見る機会を各クラス１回もつ。 ・みんなが話す機会を持ちやすいよう、少人数での語り合いをする。	・講師を招聘しての園内研修を１月に実施し、学びの機会となった。他園の職員にも語り合いに参加してもらうことで、研究テーマに添った環境の再構成につながった。 ・写真での語り合いは定期的にできたが、動画での語り合いの機会をもてなかった。次年度は動画を活用しての語り合いの機会をもてるようにしたい。 ・研究・研修担当を中心に職員会議等を有効活用して全職員が話しやすいテーマで語り合うことができ、共通理解につながった。 （課題） ・園外研修での学びを共通理解したり実践に活かしたりするためにどのような方法が有効であるか次年度考えていきたい。	・小学校でも県外などたくさんの研修に行くことがあるが、帰って来てどのように職員間で共有するか課題である。職員会議後に簡単にプレゼンなどをして伝えることもあるので、参考にしてほしい。 ・実践する前の学びを共有することはとても大事である。時間的なゆとりがないとなかなか大変だと思うが、ローテーションを組むなど協力し合って研修ができると良い。

	チーム保育の推進	・子どもの姿や遊びの共通理解をするために週一回乳児クラス会議、幼児棟会議を行う。 ・よりよいチームとなるように、行事に限らず平素の教育・保育から子どもへの声掛けや関わり方など些細なことも語り合い子どもの姿や遊びの共通理解が図れるようにする。 ・様々な職種を越えて職員全員が保育者(子どもの教育・保育に携わる人)であるという意識をもって教育・保育に取り組んでいく。	＜乳児＞ ・環境を再構成する際は、各年齢の環境を伝えあったり互いの意見を出し合ったりすることで乳児フロアを全体と捉えて話し合いをすることができた。 ・十分な話し合いをする時間を確保することには課題はあるが、その都度機会を捉え子どもの姿等を共有していくことができている。 ・様々な職種を越えて職員会議でグループワークをすることで子ども達のことを各自がどのように考えているのかを知る機会となっている。各クラスの写真を見てエピソードを聞くことで、子どもの様子を知ることができる ＜幼児＞ ・４月から子ども理解のため様々な方法を試し、ウェブマップを作って話し合う方法に辿り着いた。各クラスのウェブマップを作って話し合ったことが、子ども理解や遊びの展開などを互いに共有する機会となった。 ・勤務時間が違う職員も共に話し合うことができるように時間を工夫した。また棟会議内で、クラス以外の子どもの姿の共有や教育・保育の悩みなどを話す機会につながった。時間帯や会議メンバーを工夫し実施することで、多角的に子ども理解が深まった。 （課題） ・次年度は、より子ども理解につなげていくためのツールとして早い段階からウェブマップを使いたい。 ・グループワークを子どもの共通理解の場だけではなく、様々な職種の仕事で大切にしていることや工夫していることなどを共有する機会にもしていきたい。	・話し合いは短い時間でもその範囲内で出来ることを工夫すればよいと思う。回数を重ねることが大事だと考える。近くの人同士で話し合う、立ったまま話し合うなど、持ち方を工夫することもできる。 ・職員会議後に時間を取るという発想は学校でも同じように考えている。 ・チームで進めていくことは大事だと思うが、組織的にどうすれば取り組みやすいかを考えてほしい。小学校では仕組みを作るとチームで取り組んでいる意識が薄くなることがあった。
	小学校教育との接続	・小学校の研究会や授業参観などに参加したり幼保小の架け橋プログラムの研修に積極的に参加したりしていく。（年に１回） ・園内研修や公開保育に小学校の職員を呼びかける。 ・小学校へ行く機会をもち、職員同士が情報共有していく。（年１回）	・幼小架け橋プログラムの研修には多くの職員が参加し学びを深めた。 ・研修の中で学校の取り組みを学ぶ機会になった。 ・引継ぎの際には、一人一人の子どもについてわかりやすく伝えるように意識した。 ・小学校へ笹を取りに行ったりドングリ拾いに行ったりして学校を身近に感じることが出来た。 ・子ども同士の交流や接続はできていないが、『幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿』を意識して教育・保育に取り組んだ。 （課題） ・研修の内容を園内で共有する機会の確保が難しかった。 ・小学校の研究会や園内研修にこだわらず日を柔軟に設定し、互いの職員が一緒に保育や教育を語り合う機会をもつことができるように発信していきたい。	・小学校にも幼小連携担当がいる。研修を一緒に取り組んだり出来たかと思う。本園以外の園との交流も行っている。いつでも来てくださいとは言いづらいが、関わっていきたいと思う。 ・小学校との接続については園からの発信や提案を期待したい。